

# 史跡鹿児島城跡の本質的価値

史跡鹿児島城跡の本質的価値は、山城や居館、国内外との活発な交流や近代化の歴史を示す遺構群と指定地内から出土する中世から西南戦争（明治10年（1877））までの遺物であり、以下の3点に整理する。

## 1 史跡鹿児島城跡の構造的特徴

史跡鹿児島城跡は、鹿児島市街地の中心部に位置し、市街地を取り囲む標高約100メートルから200メートルのシラス台地の南端部に築かれた山城跡である「城山」地区、その南東面の麓にある近世の「居館」地区、「居館」地区及び「城下」地区を取り囲む外堀、東側の鹿児島湾に囲まれた外郭である「城下」地区で構成される。江戸時代を通じて薩摩藩主島津氏12代の居城となった近世城郭であり、山城と麓が一体的に機能した城郭である。

## 2 史跡鹿児島城跡の文化的様相

「居館」地区の発掘調査の結果、本丸跡において御殿内部の建物や御角櫓等の建物に伴う坪地業、基礎石列、排水溝等のほか、築山や池といった庭園の遺構、さらに能舞台の橋掛り跡が確認された。また、茶道具のほか、琉球陶器、中国やヨーロッパ製の陶磁器、オランダの文献を参考にして作られたと推測される日時計など、海外との交易によりもたらされた遺物が出土した。

## 3 史跡鹿児島城跡の日本の近代化の証左

「居館」地区の発掘調査の結果、二之丸跡において御台所跡から糠作りの焚き窯場と考えられるレンガ積み遺構、陶磁器を製造していた建物、御稽古所、水泳場等、第11代薩摩藩主島津斉彬による近代化事業の遺構が確認された。

また、明治10年（1877）の西南戦争時に築かれた堡塁跡や堡塁状の遺構が確認されたほか、御楼門周辺の石垣に多くの砲弾跡、銃弾痕が確認され、付近から銃弾が出土した。史跡鹿児島城跡は、国内最後の内戦である西南戦争の主戦場の一つにもなった重要な城郭である。

### ※ 鹿児島城とは

鹿児島城は、初代薩摩藩主島津家久によって南北朝期に築かれた上山城跡を利用して慶長6年（1601）頃に築城された。江戸時代を通じて島津家の居城で、城山の山城部分と麓の方形区画をもつ屋形部分からなる独特の構造を有した、薩摩藩の政治・軍事拠点であった。

### ※ 名称について

本計画では、次の点から、近世島津氏の居城の名称について従来一般的に用いられてきた「鶴丸城跡」ではなく「鹿児島城跡」と記載する。

- ・ 現在確認されている江戸時代の資料には「鹿児島城」と記載されており、「鶴丸城」の記載はみられないこと。（「鶴丸山之御城」はある。）
- ・ 史跡の指定名称は「鹿児島城跡」であること。

## 構造的特徴



赤枠・・・「城山」地区  
橙枠・・・「居館」地区  
青枠・・・「城下」地区  
※各色の網掛けは指定範囲



城山地区の曲輪



空堀



大手口の石造排水溝



大規模な土塁



居館地区の石垣と水堀



居館地区の御楼門橋

## 文化的様相



本丸にあった庭園



現在も使われている石橋(九臯橋)



本丸跡で確認された能舞台橋掛り跡



探勝園の園池



御楼門の鬼瓦



オランダの書物を参考にしたと考えられる石製日時計



鹿児島城下出土ヨーロッパ産陶磁器

## 日本の近代化の証左



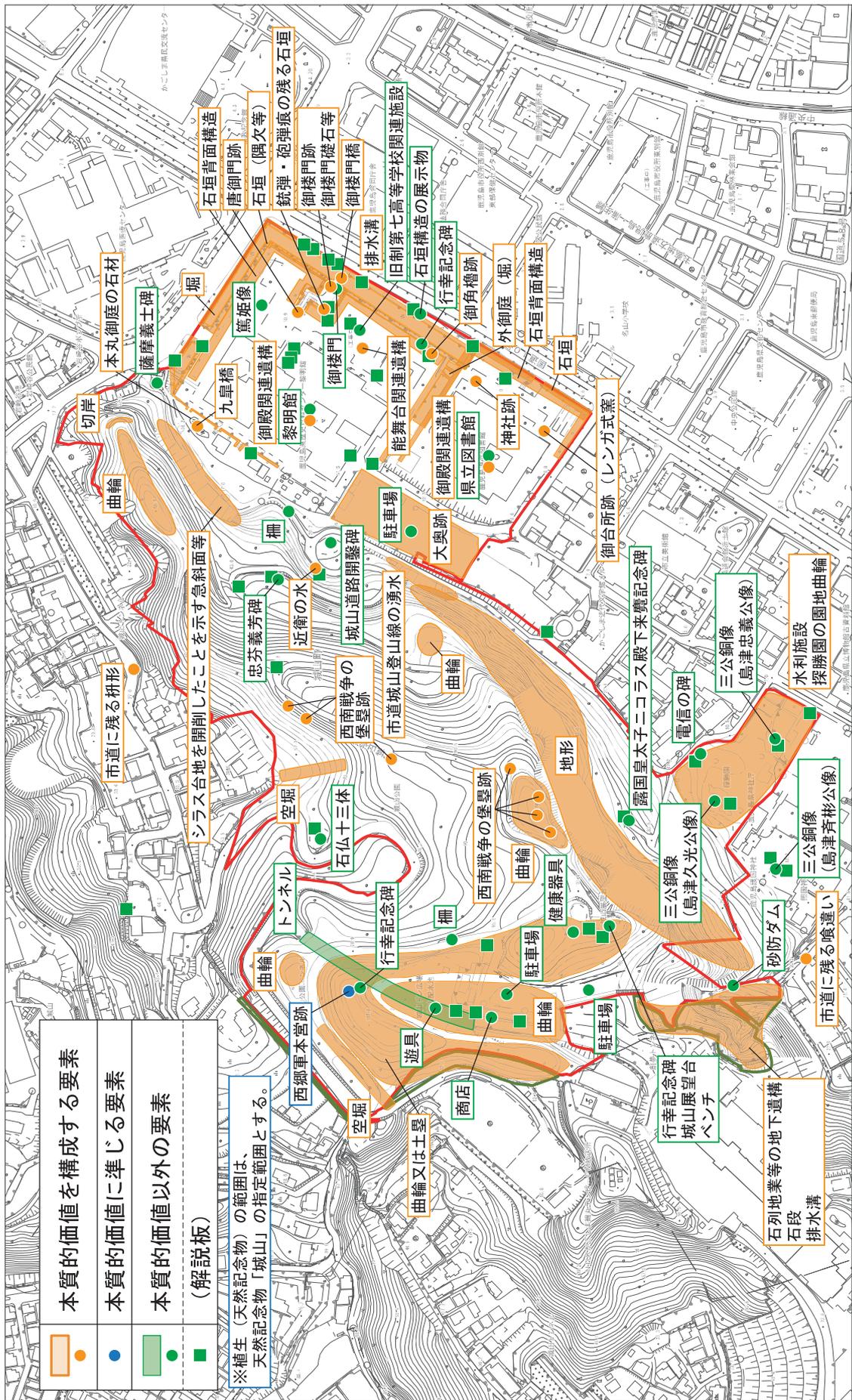
本丸跡の石垣に残る西南戦争の砲弾・銃弾痕



城山地区の堡塁跡



榊形周辺から出土した西南戦争関連遺物等



第2図 史跡の本質的価値を構成する要素等の位置図